地域再生を考える 第65回

まつりづくりとまちづくり

愛知県一宮市での「志民」活動

NPO法人志民連いちのみや理事長　税理士　星野（ほしの） 博（ひろし）

星野　博

1958年一宮市生まれ。税理士として中小企業支援業務を行いつつ、志民連いちのみや理事長として地域活性化活動を展開。市民イベント「杜の宮市」・コミュニティカフェ「com-cafe三八屋」・地ビール工房「一宮ブルワリー」などを運営。「一宮市市民活動支援センター」統括マネージャー。

『いつまでも知らんぷりを続ける「死民」でなく　文句ばかりを言うが何も動かない「私民」でなく　地域へ自己責任で能動的に働きかけていく「志民」へ』

至学館大学学長の谷岡郁子さんが今世紀初頭に定義づけた「志民」概念を得て、私たちは「まつりづくり」と名づけるさまざまなまちづくり活動を展開しています。NPO法人志民連いちのみやの活動の一部をお伝えします。

■一宮って？…巨大繊維産業と地域性

愛知県一宮市は、尾張国一之宮真清田神社を地域の核としてまちがつくられ、一八世紀に始まった門前市「三八市」が定着して本町通商店街が形成されました。木曽川の豊富な水、豊かで安定した濃尾平野などの環境に加え、名古屋から近いことから交通の要所としての役割も持ち、古くから繊維産業が勃興し、毛織物が盛んに。第二次世界大戦後の物資不足から復興期には、莫大な富を地域へもたらしました。繊維産業のヒトやカネを基盤に、地域の商業が確保され、社会資本が整備され、住民サービスも安定していました。

しかし、繊維を地場産業とした他の多くの地域同様、一宮の繁栄は徐々に終焉していきました。繊維産業の富の巨大さに頼ってきたせいか、その後ビジネスでもソーシャルでも新たな動きは弱いまま時代が過ぎていきました。過去の世代の大きなバブルの蓄積はあるものの、現役世代の資源不足、支援不足、機会不足が続きました。

■まつりづくりを、手づくりで

一宮最大のイベントである「おりもの感謝祭一宮七夕まつり」は莫大な資金を使う一方で、地元住民、とりわけ若年層では関心のない人が増えていました。そんな中、一九九八年の七夕まつりの際に、真清田神社裏の公園にある土俵で野外無料コンサート「どすこいライブ」を開催しました。私たち自身が楽しい「七夕まつり」を、私たち自身が企画し準備し運営し、皆で一緒に楽しむ。土俵をステージとし、芝の観客席にはピクニックのように人々が三々五々集まって、音楽などを楽しみます。

翌一九九九年の七夕まつりでは、商店街団体とともに、一宮市役所前の公園を無料休憩所・フードコート・野外ライブスペースとする「にぎわい広場」を始めました。また、年間を通して路上ライブ「ドコデモまちかどライブ」や、空き店舗を利用したアート展「テンポラリー」などのカルチャーイベントを開催し、さまざまな「まつりづくり」を展開していきます。

■杜の宮市（もりのみやいち）と、手づくり文化

こうした活動を見た真清田神社の飯田宮司から、神社境内を利用して文化発信をしていく事業をしないかと誘われ、二〇〇一年から始まったのが「杜の宮市」です。手づくり、クラフトをテーマとし、アートやクラフト作品などの作り手自身がブースを出し、直接来場者と話すことで、大量生産品の売買とは違う濃厚なコミュニケーションをとることができます。アートやクラフト作品の販売のみならず、体験教室や飲食、ライブ演奏もすべて手づくりがテーマです。

「杜の宮市」は、資源ゼロから市民で紡ぎ出し、初回は真清田神社境内を会場として五〇〇〇人ほどの来場者でしたが、毎年継続した結果、本町通商店街全体やその周辺を会場として全長一kmを超え、出展者は全国から三八〇ブースほど、来場者は三万人超、一日の場内資金移動は三五〇〇万円超という規模に拡大しました。規模は拡大しても、テーマはやはり手づくり、クラフトです。

■まつりから日常へ、ウォーカブルへ

ヒト・モノ・カネがないまま公共地を活用し、私たち自身が望む地域社会を自分たちで生み出そうとする活動は、地域内外の同志と連携し、中間支援活動へと広がり、まちづくりNPO法人志民連いちのみやの設立につながりました。同法人は「一宮市市民活動支援センター」を受託運営し、コミュニティカフェ「com-cafe三八屋」の運営やオリジナルコーヒーの開発、日本最小規模のクラフトビール工房「一宮ブルワリー」による一宮のビール復興、多目的交流空地「ブリンスアレイ」の運営など、まつりから日常へと活動を展開しています。

他方、一宮市ではTMO（タウンマネージメント機関）やまちづくり会社が不在のまま、二〇二〇年にウォーカブル事業がスタートしました。二〇二二年に志民連いちのみやが都市再生推進法人として指定され、安全安心で歩きたくなる中心市街地の未来に向けて、協働・協力をしています。

公共地を活用して地域再生を模索してきた志民連いちのみやは、そのあがきや経験を地域へ還元しつつ、人間ファーストでオリジナルなウォーカブルタウンを目指して更に活動し続けています。

2023年11月、尾張一宮駅前のウォーカブルイベント

2023年11月、尾張一宮駅前。羊がいるBISHU FES. marcheの様子

2024年5月、com-cafe三八屋2階のシェアスペース。ショーの練習がそのままBGMに

2024年5月、第22回杜の宮市。本町通商店街の様子

2024年5月、第22回杜の宮市。真清田神社楼門前の様子

団地再生まちづくり 4
造むサステナブルな団地・まちづくり
編著／団地再生支援協会
NPO団地再生研究会
合人社計画研究所
定価2,090円(税込)／水曜社

団地再生まちづくり 5
日本のサステナブル社会のカギは「団地再生」にある
編著／団地再生支援協会
合人社計画研究所
定価2,750円(税込)／水曜社

「地域再生を考える」編集委員会

季節の花

蓮（ハス）

アジアやオーストラリアなどを原産とする水生植物です。泥水の中から美しい花を咲かせる姿が、仏教では智慧や慈悲の象徴とされており、『阿弥陀経』では、極楽には蓮の花が咲いていると説かれています。

開花時期は七～八月。水面から伸びた茎の先に大きな丸い葉を開きます。その葉の間からさらに茎を伸ばし、ピンクなどの花を咲かせます。早朝に開花し、昼には花を閉じてしまいます。スイレンと混同されやすいですが、蓮は花が水面より高い位置で咲き、スイレンは水面近くで咲きます。

花言葉は「清らかな心」「神聖」「沈着」「雄弁」など。七月三日、八日、八月一五日、九月二六日の誕生花です。

ルコウソウ

日本には江戸時代初期にカンボジアから伝えられました。ルコウソウ（縷紅草）という名は葉が糸状で花が紅いことから付けられました。

開花時期は七～一〇月。赤やピンク、オレンジなどの鮮やかな星形の花を咲かせます。暑さに強く、つる性で旺盛に伸びるので、フェンスやネットに絡ませてグリーンカーテンとして使われます。葉が糸のように細く、その姿は繊細なレースのカーテンともいわれています。本来は多年草ですが、寒さに弱いため、園芸的には一年草として扱われています。

花言葉は「元気」「繊細な愛」「おせっかい」など。七月二三日、八月一〇日、二四日の誕生花です。

建築仕上塗材 国内シェアNo.1
※2018年日本建築仕上材工業会調べ
建築仕上材の総合メーカー
エスケー化研株式会社
SK KAKEN
本　社：大阪府茨木市中穂積 3-5-25　☎072-621-7733

あなたの「大切」を、セコムする。
セコム ホームセキュリティ
お問い合わせ 資料請求は　セコム株式会社　0120-756-892